



なごや街角今昔

【1】名古屋の街…名古屋城築城

池田 誠一

街角の歴史

身近にある「街」はどのようにして出来てきたのでしょうか。私たちは世界や国の歴史を学び、都市の歴史に触れることもあります。意外に身近な小さな街角の歴史について知らないことが多いのではないのでしょうか。

この連載では、名古屋のよく知られた街角に立って、その街がなぜ、どのようにして出来てきたかを追ってみようと思います。これまでの古道歩きが昔の街から今を眺めるものだったとすれば、こんどは今の街から昔をたどってみるということでしょうか。

そこに何かのドラマが潜んでいることを期待しつつ、「なごや街角今昔」をスタートすることにします。

1 なぜ名古屋が…

名古屋は今では我が国で東京、大阪に次ぐ都市圏になっています。しかし、今から500年前にはほとんど無名といえる地域でした。江戸時代、尾張藩のときでも、江戸、京、大坂の三都からは大きく離れ、金沢、仙台と並ぶ中堅都市でした。

その名古屋が江戸時代に御三家筆頭の地位を得、さらに今日のように第3の都市圏へと成長したのはなぜでしょうか。街角の歴史に入る前に、まずこの名古屋という街が変わった契機から考えてみたいと思います。

2 名古屋の街の契機

(1) 名古屋の街の始まり

名古屋の街には大きく二つの起源があります。熱田神宮と名古屋城です。熱田神宮の歴史は古代、日本武尊の神話の時代まで遡ります。そこに門前町のようなものが出来たのは何時頃か分かりません。しかし付近を古代には東海道が、また鎌倉・室町時代には鎌倉街道が通過していたとされていることから、古くから相当の交通があって、家並みも存在したと考えられます。

しかしながら、なんと言っても名古屋を今日のような大都市に変えた第1の契機は17世

紀初め名古屋城の築城でしよう。

名古屋城はその前にあった織田信長の居城、那古野城の跡に造られました。城が造られたのは1520年代。今川氏が柳の丸という砦を造り、それを織田信秀が奪って那古野城とし、信長は生まれるとすぐその城主にされました。名古屋城築城当時を示す地図には城の周りに寺社が集まり、いくつかの家並みも見られます。

(図1)

信長が20余年を過ごした城は、そのあとはしばらくして衰退し廃城となっていました。徳川家康はそこに目をつけたのです。清須から移転する候補として検討されたのは、①小牧城跡、②那古野城跡、③古渡城跡の3つでした。那古野に決めたのは家康でした。彼は、ここなら日本全国を相手にしても大丈夫な城が出来ると言ったといいます。

(2) 立地が決めた名古屋

家康が清須から名古屋への移転を決断した裏には西国、豊臣方との決戦がありました。江戸に居て大阪方との戦いを受ける場所として、関が原や鈴鹿峠から江戸へのルートを集約している尾張が選ばれたのです。那古野城跡を決めた時も、木曾三川、庄内川に囲まれ、そこが台地の角にあり、西北に泥地帯があることを評価するなど、西側からの攻撃に対する備えが意識されていたことが分かります。

1609年、那古野への移転が決まり、翌年春には西国の諸大名を動員しての工事が始まりました。城郭の土木工事が終わったのはわずか半年後の1610年秋。城下には清須からの移住も始まりました。城が完成したのは1612年。徳川御三家の筆頭の居城にふさわしい名城になりました。

(3) 城下町名古屋

この城には軍事面だけではなく、城下を都

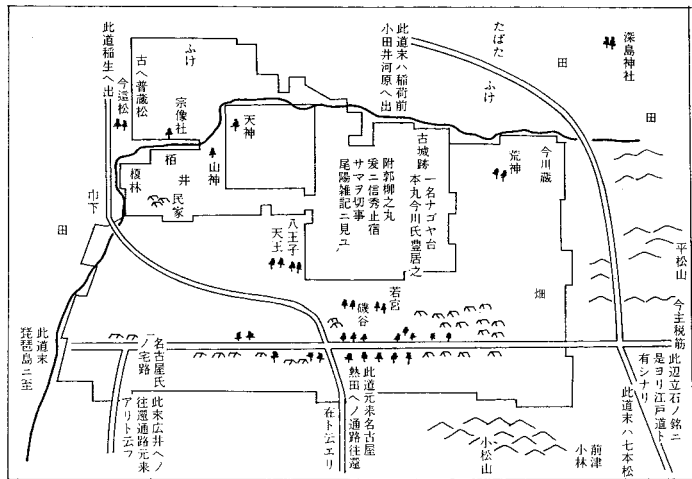


図1 名古屋城築城のころの城の付近、文献①(二の丸のところに古城跡とある)

市として発展させるための幾つもの配慮がありました。

まず城の正面に碁盤割の町人町を配し、その真ん中を東海道の宿場になった熱田に向かって真直ぐの本町通を作ったことでしょう。また北の中山道につながる美濃路をその本町通に通し、街と海とをつなぐ6*の運河一堀川を掘削しました。(図2) 家康は庄内川の枇杷島に市場をつくり、橋を架けることを許すなど当時の常識にはない大胆な都市計画を実行しました。

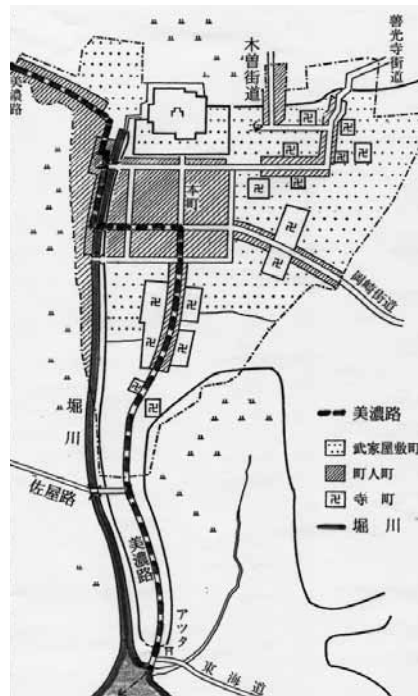


図2 名古屋の城下、文献②(台地をうまく使って街がつくられた)

そして人口が5万人を超す清須の街をそっくり移転させるという大事業によって、名古屋は一気に大都市になったのです。

3 名古屋城築城の 残影をさがして

二の丸にある那古野城跡の碑



今、その名古屋城築城の頃の面影は残っているのでしょうか。お城の付近を歩いてみます。

地下鉄の市役所駅を降りてまず名古屋城に行きます。(図3) 東門を入ると二の丸庭園があり、その入口に那古野城跡の碑があります。江戸時代には古城はこの辺りとされていたようですが、最近の調査では那古野城は南へ三の丸一帯にも広がる規模を持っていたと推測されています。本丸の外を回り深井丸に行きます。深井



昔は三の丸の土塁だった



清須橋から西北をみる

丸は家康が西国大名の財力を費消させるために湿地の上に造らせたといわれます。西北角の清須橋の脇から、この城の立地を決めた湿地帯を見渡しても今では市街化されてしまって面影はありません。

城の正門を出て、堀の西に周りとお堀から見上げる名古屋城がきれいです。南に国道を渡って土手沿いに進むと、堀川と名古屋台地の段差がよく分かります。外堀通で曲がって、堀に沿って東に行きます。右側には御園通など碁盤割の通りが現れます。

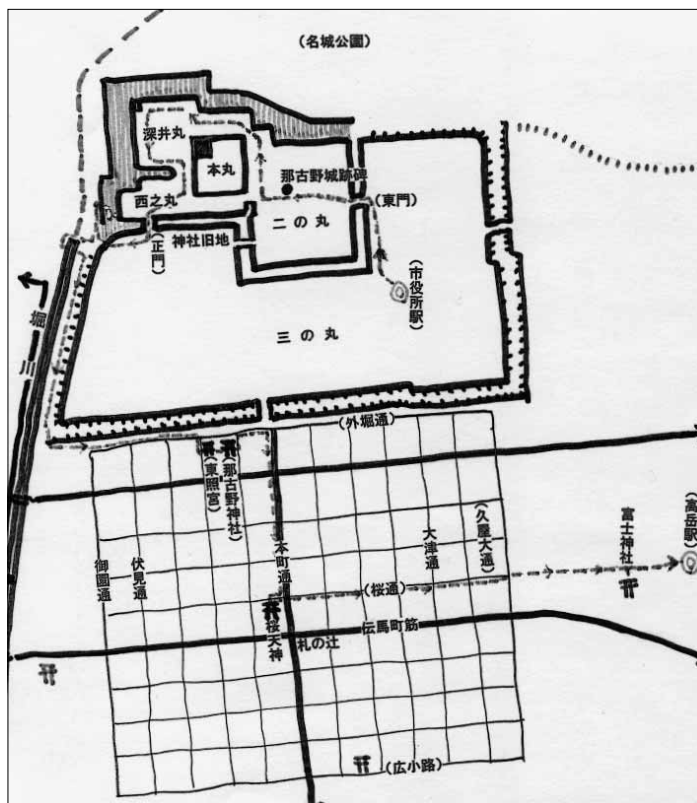


図3 名古屋城築城の残影を追って(----が一応のルート)

*

国道の伏見通を過ぎて東2本目を右に入ると東照宮があります。初代藩主義直が作り、元々三の丸内にあったものを明治になってここに移しました。その東隣は昔天王社と呼ばれた那古野神社です。築城前に郭内にはいくつかの神社がありました。その中で、家康が外に移そうとしても「遷座不可」との神饌がでて留まり、城の鎮守神となったのがこの神社です。これも元々三の丸内にあったものです。築城で外に出された神社には尾張総鎮守として南に移った若宮社、鬼門の守りとして東北に移った八王寺社などがあります。

*

築城の物語が思わぬ所に残っています。本町通を南に行き、桜通を渡った右にある桜天神です。この辺りには元は万松寺があり、桜天神はその付属神でした。ここに加藤清正が普請場を作るため、寺は南に移されました。築城には石の運搬と加工が問題です。桜通を東に1*ほど行った所に富士神社があります。この神社には浅野幸長が普請場を設けました。ここにはその時残したという大名の刻印のある石が残されています。築城で運搬した石の



桜通に面していることがウソのような富士神社



浅野家の刻印のある築城石の残り



昔は天王社とよばれ三の丸にあった那古野神社中には、途中でこぼれた石もあり、各地に残っています。瀬戸街道にある「つんぼ石」。名東区にある「猪子石」。北区や中川区等にも…。落とした石は縁起が悪いから拾わなかったのだということです。

*

こう辿ってくると土地の立地、工事の有様などおぼろげながら名古屋城築城のイメージが浮かんでこないでしょうか。富士神社を東にいくと地下鉄の高岳駅です。

4 名古屋と立地

明治時代、東の東京が首都になって、京・大阪等との交通が重要になりました。名古屋はこの間を結ぶ時にも重要な位置を占めることになりました。とりわけ明治18年初の鉄道敷設の時が分れ目になりました。この時名古屋を通る路線である東海道鉄道の誘致に成功してからは、東京と大阪を結ぶ交通路は名古屋という都市を無視できないようになったといえます。

名古屋の変身の契機を考えると、先に述べた名古屋城の築城とこの名古屋駅の誘致の2つが浮かび上がってきます。面白いことにこの2つはいずれも、東京(江戸)と大阪(西国)との間の拠点であることがポイントになっているのです。しかしこのことは、同時に東京と大阪に次ぐ第3の地域を出ないという名古屋の現実を示しているように思えます。

〈主な参考文献〉

- ①名古屋市編「名古屋城史」(1959、名古屋市役所)
- ②芥子川律治「家康が作った革新名古屋」(1977、地産出版)